

「HOUSE VISION 2 2016 TOKYO EXHIBITION」に パナソニック、LIXIL、TOTO・YKK AP の4社が出展

「HOUSE VISION」とは

2016年7月30日～2016年8月28日、東京都江東区青海で「HOUSE VISION 2 2016 TOKYO EXHIBITION」が開催されました。「HOUSE VISION」とは、日本人の暮らし方を具体的に提示するためにつくられた情報発信と研究のプラットフォームです。「新しい常識で都市に住もう」の理念のもと、日本デザインセンターの原研哉氏（展覧会ディレクター／日本デザインセンター代表取締役社長）が中心となり、2011年より、建築家、研究者、多様な企業、行政との対話を重ねた活動を続け、研究会、シンポジウム、書籍、展覧会などさまざまな方法で、住まいの「新しい常識」を発信しています。2013年には23日間にわたって「新しい常識で家をつくろう」というテーマのもと、「HOUSE VISION 2013」東京展を開催し、「家」を基軸とした新しい産業の可能性を提示しました。

今回開催された「HOUSE VISION 2 2016」東京展は、「CO-DIVIDUAL コ・ディビジュアルー分かれてつながる／離れてあつまる」をテーマとし、エネルギー、通信、移動、高齢化社会の可能性、都市と地域の関係などを「家」を起点に考え、その可能性を具体化した展覧会です。15の企業と13の建築家・ユニット、クリエイターにより12の展示ハウスが提案されました。



会場全景

【©HOUSE VISION | 写真：Nacása & Partners Inc】

【12の展示ハウス】

1. [冷蔵庫が外から開く家]
ヤマトホールディングス × 柴田文江
2. [吉野杉の家] Airbnb × 長谷川豪
3. [の家] Panasonic × 永山祐子
4. [棚田オフィス] 無印良品 × アトリエ・ワン
5. [遊動の家] 三越伊勢丹 × 谷尻誠・吉田愛
6. [賃貸空間タワー] 大東建託 × 藤本壮介
7. [凝縮と開放の家] LIXIL × 坂 茂
8. [市松の水辺] 住友林業 × 西島清順 × 隈研吾
9. [木目の家] 凸版印刷
× 日本デザインセンター原デザイン研究所
10. [内と外の間／家具と部屋の間]
TOTO・YKK AP × 五十嵐淳・藤森泰司
11. [グラウンド・サード・リビング]
TOYOTA × 隈研吾
12. [電波の屋根を持つ家]
カルチュア・コンビニエンス・クラブ
× 日本デザインセンター原デザイン研究所
× 中島信也



会場全体プラン
【©HOUSE VISION | CG：橋本健一】

Panasonic × 永山祐子

「IoT で空間発明」 新しい住まいと暮らし方のアイデアを提案

パナソニック株式会社 ブランドコミュニケーション本部 稗田 悟



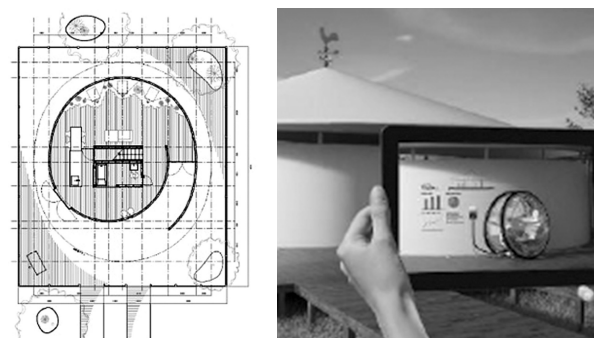
建物全景

■出展の概要

パナソニックは、「IoT で空間発明」をテーマに、独自の AR（拡張現実）技術などを取り入れたプレゼンテーション展示によって、IoT（Internet of Things）が日常となる時代の住まいと暮らし方のアイデアをご提案しました。

建築家の永山祐子氏とともに、あえてモノを必要最小限に絞るくらしと、建築構成を単純化し、簡単に建築できる家を舞台として設定。会場内のエキシビジョンハウス #3 に展示する「の家」において、IoT を活用した家と新しいくらし方を表現しています。

会場では、壁面などにあるマーカーにタブレット（当日貸し出し）をかざすことで、AR（拡張現実）でアクションがスタート。新しいくらし方のアイデアを次々とご覧いただきました。また、建物内の壁面スクリーンでは、プレゼンテーション映像を上映。多くの方に好評をいただきました。



プレゼンテーション光景イメージ

■出展の背景

家電製品や住宅設備を通して、人々のよりよいくらしの実現と、社会課題の解決を目指してきた会社です。「人が中心」という原点・DNA は、街やクルマなどさまざまな分野にも、脈々と受け継がれています。

社内外の方々と交えて、最新技術で最先端の住宅を議論する機会をさらに増やしたいというのが今回の出展の発端です。

これから10年後、100年後の住宅のあり方を考えた時、家の形や意味が変わるかもしれません。例えば、今までの家は、主に買うか借りるかの二者択一でした。しかしこれからは、シェアすることや貸したりすることも視野に入れて、家を考えていく時代になってきていると言えます。

日本の住宅は今まさに転換期にあります。そしてゆくゆくは、「家」だけに留まらず、「くらし方」自体も変わっていくと考えています。

例えば洗濯。既に世の中には、ネットクリーニングという方法もあるように、将来は「洗濯する」という行為自体が変わるかもしれません。

だからこそ、このタイミングで、“住”の新しい提案として時代の流れである「IoT」とのクロスバリューイノベーションを、どんどん発展させていかなければならないと感じ、出展に挑みました。

HOUSE VISION は、「家」について考え直す良い機会になりました。今までも、「家」について考える機会自体はありましたが、パブリックな場での展示・紹介・アイデアのぶつけ合いといった意味で、こういう場は多いとは言えません。

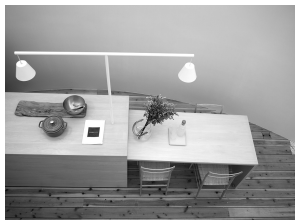
今回はさまざまな世代・職業のお客様にご覧いただき、実に多様な意見をいただきました。中でも「エレクトロニクスと住宅の両方を手掛けるパナソニックの提案に今後も大いに期待したい」という声も多く、身が引き締まる思いです。

なお今回のハウスビジョンでは、この「の家」のほか、長谷川豪氏の「吉野杉の家」においても、商品提供をさせていただきました。スイッチのプレートやキッチンのカウンターを吉野杉で作っていただき、プロダクトデザインの新たな刺激もいただきました。

■「の家」について

「家からすべて取り除いて、本当に必要なものだけを残したら何が残るか？」という問いかけから始まりました。

そのため、「の家」には、モンゴルの移動式住宅“パオ (PAO)”の思想が取り入れられています。どこにでも建てられるけれど、最新技術が詰まっているというアイデアです。



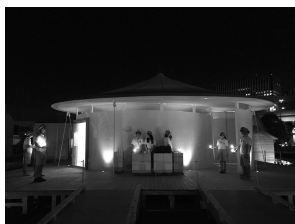
ダイニングスペース



ベッドスペース

外の温度や湿度など、いろんな状況を敏感に察知し、中に住んでいる人たちに、まるで皮ふのように伝えられるようになっています。

昼夜で印象がガラッと変わるのも見どころです。昼は周りの風景と合わさってナチュラルに、夜は中の照明の光が漏れて幻想的な表情を見せてくれます。



昼夜の光景

今までのように、どこかに場所を決めた住まいではなく、「コト」達成のための住まいが、現代には合うと考えています。

さらに「の家」は、ドイツ語の“新しい (noie)”という意味もあります。まさに、“新しい暮らし方”の体現が「の家」なのです。

家を建てる・貸すといったハウスメーカーのネットワークを持つ私たちだからこそ、もっと“暮らし方”について考えていかなければならないですね。

【建築家・永山祐子氏】

今よりもっと、“軽やかに住む”ことが、現代のくらし方とマッチするのではないかと。

今までの住まいは、外界から身を守る意味合いが強いように感じていました。しかし、これからの家は、簡単にすぐどこでも建てられて、また壊して場所を移せるような、もう少し“軽やかに住む”ことが、求められているのではないかと考えました。そのため、「の」の字に曲げられた薄い壁に2重のテント膜の軽い屋根が乗った単純な構成となっています。

この“の”の字の構成は、内側から外側に、シームレスにつながっていく動線が作れることが特徴です。

また、空間を作り上げている白い壁は、ホワイトボードのような役割をしています。IoT 技術を活かし、住む人が好きなものを自分でピンナップできるという意味を持っています。

当初は、パナソニック＝家電というイメージを持っていましたが、議論を重ねていくうちに今までのイメージを払拭し、モノや家電という固定化されたものを置くよりも、“くらしに新しい考え方を持たせよう”という、高い目的を持って取り組むことができました。その結果、分かりやすくパナソニックの商品が置かれる空間ではなく、新しい暮らしとテクノロジーの提案を見せる場となりました。「新しい家とは何か」「くらしの中に本当に必要なものとは何なのか」を自問する、いい機会になったと思います。

「の家」は、時間によって中も外も雰囲気が変わります。訪れた方には、ぜひ「の家」を媒介にした外界との繋がり、家族のコミュニケーションの新しい形を感じていただき、「未来のくらし方」について考えるきっかけとなればいいなと思っています。



建築家・永山祐子氏

【永山祐子氏のプロフィール】

1975 年東京生まれ。1998 年、昭和女子大学生生活美学科卒業。1998 年～2002 年、青木淳建築計画事務所勤務。2002 年、永山祐子建築設計設立。

主な仕事に、「LOUIS VUITTON 京都大丸店」「丘のある家」「カヤバ珈琲」「木屋旅館」「豊島横尾館」「渋谷西武 AB 館 5F」など。ロレアル賞奨励賞、JCD デザイン賞奨励賞、AR Awards (UK) 優秀賞、ARCHITECTURAL RECORD Award, Design Vanguard 2012、JIA 新人賞「豊島横尾館」(2014 年) など。

■プレゼンテーションの一例

今回のプレゼンテーションは、建築設計の合意形成をサポートしているパナソニックのVRチームが担当しました。

ITや人工知能といったテクノロジーの進展により、住まいや暮らしがどんなふうに変わっていくのか。エレクトロニクスと住宅の両方を手掛ける企業として、身のまわりの住空間を見直し、新しい価値を生み出す空間を考え、皆さんのご意見を頂戴しました。

【外壁を使ったARプレゼンテーション】

IoTによって生まれる、新しい暮らし・新しい空間。そのアイデアスタディ20テーマを、タブレットを使ったARでご覧いただきました。

壁面のマーカーにタブレットをかざすと、ARで動くしくみです。



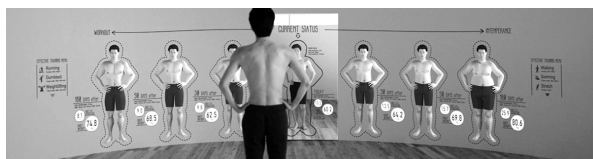
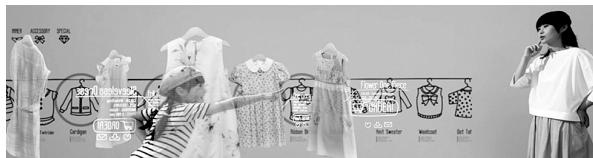
節電ポイントがたまる家

ネコ警備員の家

【中の壁面を使った映像プレゼンテーション】

スタジアムが家にある、クローゼットがない家、太ることがこわくなる空間など、IoTを活用した新しいサービスや暮らし方を、壁面を利用した大画面でご覧いただきました。

こちらでも、映像の中にARのマーカーを組み込み、映像×ARの演出もお楽しみいただきました。



映像プレゼンテーション

■来場されたお客様の声

連日猛暑のなか、多くのお客様がパナソニックブースを訪れてくださいました。好評のため、時にはお待たせすることもあり、大変申し訳なく、しかしありがたいと感謝しております。

ご覧いただいたお客様には、次のような言葉をいただきました。その一例をご紹介します。

- 将来のIoTと住宅の融合に関しては、まだ発展途上だけど、自然な流れだと思う。
- IoTが住宅と組み合わせることで、将来の住宅は「利便性」に加えて、「自由度」、「カスタマイズ性」が高まると感じる。
- 家の中ですべて完結してしまい、外に出なくなったり、人や体験を通じたコミュニケーションがなくなるのは不安。
- IoTを介して、家と家／家とインフラがつながることでコミュニティ形成に活用でき、社会的な課題（高齢化や介護等）が解決できる可能性がある。
- 映像の中でもっとも興味を持たれたのは、「愛からはじまるIoT」。「手書きの文字がそのまま送れるからあたたかい」、「人間味が介在している」と人との繋がりが感じられる。



映像プレゼンテーション

- IoTと結びつくことで、“よりダイナミズムを持った”、“より開かれた”、“より愛される”、“より幸せを感じられるような”住宅を作れるようになる。
- IoTのノウハウがあるパナソニックが住宅分野に積極的に参加することは大いに歓迎。

パナソニックでは、単なる技術先行の住宅ではなく、例えば、ひとり暮らしの高齢者がさびしさを微塵も感じずに暮らせたり、ご近所との新しい関係を築けたり、かつてなかった利便性を享受できるなど、よりよい暮らし・よりよい社会の実現を目指し、新しい空間を考えてまいります。

LIXIL × 坂 茂

「凝縮と開放の家」をテーマに 建築家 坂 茂氏とコラボレーション

株式会社 LIXIL 生活価値研究所 所長 水野 治幸

初回に引き続き2回目の出展となるLIXILは、建築家の坂 茂氏とともに、「凝縮と開放の家」をテーマとしたエキシビションハウスを出展しました。経営統合から6年を経た今回の取り組みは、メーカーとしての技術イノベーションを基軸に、ハウジングおよび水まわりの先進技術開発プロジェクトチームと連動した内容となりました。加えて、低コストで軽快な家を考える建築家・坂 茂氏との絶妙なコラボレーションにより、住宅建設のプロに頼らなくとも、生活者の誰もが気軽に手に入れられる、まったく新しい考え方の住まいづくりを提案することができました。

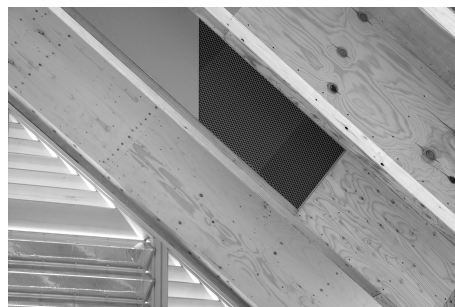


LIXIL × 坂 茂「凝縮と開放の家」。
向かって右側のガラス戸は家の側面に収納可能
©HOUSE VISION | 写真: Nacása & Partners Inc

◆ PHP パネルによる開放的な骨組み

建屋は、棚や机などに使われる、ペーパーハニカムを合板で挟み込んだ「PHP パネル」という、シンプルでありながら強度と軽さを兼ね備えた新しい素材を用いて建てられました。坂氏による全く新しい着想の建築構造です。軽くて丈夫な PHP パネルでつくられた“家形”のフレームを土台に取りつけることで、あっという間に基本の骨組みは完成します。このフレームで建築を支える構造なので、室内空間には太い梁も大きな柱もありません。敷地を最大に活かした、圧倒的に開放感のある空間がうまれました。

また、軽くて丈夫な PHP パネルはローコストでの輸送ができるようになりました。短い工期で簡単に建てられるので、災害時の仮設住宅としても活用されはじめています。



PHP パネルに内蔵されたペーパーハニカム

一方、外壁と屋根は防水性のあるテント膜の素材をジッパーで固定するという斬新な発想で、まるで家が洋服を着ているようにジッパーで脱着でき、好きな色や柄をプリントすることも可能です。

◆ 水まわりを凝縮した「ライフコア」

風呂・トイレ・キッチン・洗面、さらには照明・換気・空調までもひとかたまりに凝縮させ、給排水や電気配線を床下や壁内ではなく上方に処理する、画期的なシステムユニットを LIXIL は考案しました。また「風呂とトイレ」、「トイレと洗面」「風呂とトイレとキッチンと洗面」など、暮らしに合わせてユニットを選ぶことも可能です。

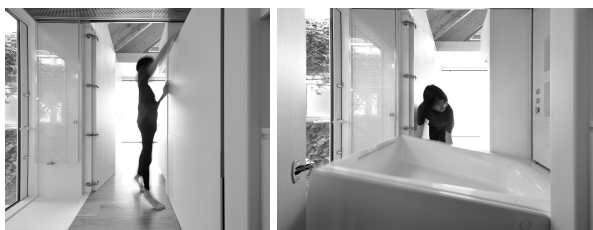
生活の核となる機能を集約したこのテクノロジーは、「ライフコア (LIFE CORE)」とでも呼ぶべき機



風呂、トイレ、キッチン、洗面などの水まわりと、空調などの電気設備が集約され、自由に配置できる「ライフコア」

©HOUSE VISION | 写真: Nacása & Partners Inc

構です。このシステムを使用すれば、建築の構造・工法を単純化でき、住み手も設計に関わることが可能となり、施工にも特別な技術が不要となります。既存のインフラ配管にとらわれることが無いので、大掛かりなりノベーションや、オフィスをマンションに、学校をホテルに、といった建物用途変更にいつでも威力を発揮し、時代や社会の変化への対応も可能になります。



浴槽は、使用していない時は壁面に格納されている

©HOUSE VISION | 写真：Nacása & Partners Inc

◆暮らしを開放する「開・空間」

LIXIL は人と自然をつなぎ、暮らしを広げ、開放する空間づくりにも取り組んでいます。大きな開口部が実現する快適で豊かな暮らしを、「開・空間」という新しい考え方と革新的なデザインとテクノロジーで実現しました。

建物正面の大きなガラス窓は、水平になるまで跳ね上げることができます。また半分スライドさせた位置で90度回転させることで家の側面に収納する機構を取り入れました。窓をすべて開け放つと、デッキと室内が遮るものなく一つにつながった大きなリビングが現れます。古き良き日本の縁側にあった雨戸や蔀戸(しとみど)を彷彿させつつも、世界の現代建築に向けた暮らしの豊かさを提案しています。



窓をすべて解放すると、内部とウッドデッキがシームレスに連続する大空間が出現

©HOUSE VISION | 写真：Nacása & Partners Inc

◆家をひきたてる周辺建材

リビングとひとつづきになったデッキは、大きな開口部の役割を倍増させます。スッキリとして、かつ操作しやすい玄関ドアや、アルミニウムの型材を細工したカーポート庇なども、LIXIL の技術の粋を集めて具現化しました。



右手の玄関ドアは、ハンドルをなくしたスタイリッシュなデザイン

◆WEB で家の設計が可能に

パネルやユニットなどを駆使したシンプルな建築構造システムのため、住み手自身が簡単にWEBで広さや間取りをアレンジし、見積もり計算ができることを想定しています。



多くの方が見学に訪れ、活発な意見が交わされた

最後に

建築やデザインに関わる方々も多く来場されるこの展覧会で、「凝縮と開放の家」が画期的な提案として評価いただけたことは、私たちにとってたいへんな励みになりました。

LIXIL は、これからもより良い暮らしを創造するチャレンジを続けます。水まわりとハウジングの技術イノベーションを通じた私たちの新たな価値創造を、社会に向けて提案し、社会とのコミュニケーションの中から事業の未来を追求していくことが、私たちメーカーの使命だと確信しております。



【プロフィール】

坂 茂 (Shigeru BAN)

建築家

1957年東京生まれ。84年クーパー・ユニオン建築学部(ニューヨーク)卒業。82-83年、磯崎新アトリエ勤務。85年、坂茂建築設計を設立。95年から国連難民高等弁務官事務所コンサルタント、同時にNGO・VAN設立。フランス芸術文化勲章コマンドゥール(2014)、ブリツカー賞(2014)など受賞。2011年より京都造形芸術大学教授、2015年より慶應義塾大学環境情報学部特別招聘教授。

www.shigerubanarchitects.com

※本稿は㈱LIXILのPR誌「LIXIL eye」2016年No.12より一部変更し転載したものです。

TOTO・YKK AP × 五十嵐 淳・藤森泰司

「内と外の間／家具と部屋の間」 ～縁側から発想した居心地の良い空間を提案～

TOTO 株式会社 デザイン本部 デザイン企画部 谷 潤一
YKK AP 株式会社 開発本部 デザインセンター 佐古 泰規

■参加にあたって

前回(2013年)に続き2回目の参加となるTOTOとYKK APは建築家／五十嵐淳氏・家具デザイナー／藤森泰司氏と共に、「内と外の間／家具と部屋の間」というテーマに取り組みました。

ハウスヴィジョンの主旨をうけ、プロダクトだけに留まらず、より大きな視点からこれからの住まいや暮らしを掘り下げ、我々の提供する商品が使われた心地よい空間を具体的に示せないかと考えました。そこで、専門領域が異なる、両社の商品に思いが深い、お二人のクリエイターとのコラボレーションを開始しました。



写真1 藤森泰司氏と五十嵐淳氏

■テーマコンセプト

テーマ設定においては、どのような方向にしていくなか検討する中で、お二人のクリエイターに共通していた「内部からの発想」を出発点に、これまでにない生活する場のありようを提示することを目指しました。

その軸となる方向性は、生活の中での様々な行為を受け止める住まいのエレメントが、つなぎ合わさったり拡張しながら部屋を構成し、それがそのまま建築になっていくというイメージです。言い換えれば、内部を考えていくと同時に外部も成立するようなシステムが作れないかと模索していきました。

ひとつの完結した家の提案ではなく、「窓」そして「家具・設備」の個別の可能性を探りながら、総体としての家の魅力を部分から再発見していく試みになります。

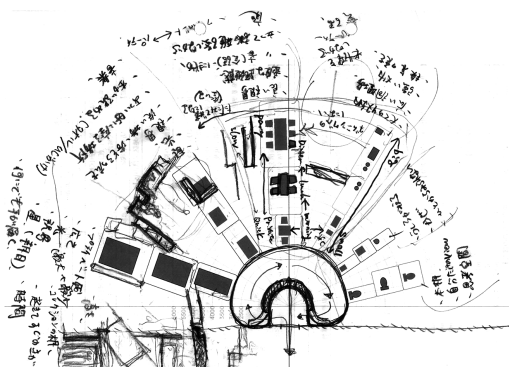


写真2 検討段階のスケッチ

>五十嵐淳氏の考え

はじめは「窓」を単なる壁に開けられた開口部と考えるのをやめ、そこを新たな機能を仮想した空間として読み込んでみるという着想でした。

かつて日本の住まいにあった「縁側」は温熱環境を調整する空間であると同時に内外に繋がる心地よい中間領域でもありました。近年、窓の性能が高まるにつれ、その機能は窓の中に内包され、いつしか居場所としての空間もなくなってしまいました。その「縁側」のもつ空間性を現代に再定義できないかと考え展開していきました。

>藤森泰司氏の考え

一方、家具を部屋から切り離された道具と考えず、空間と機能を同時に作り出すような家具のあり方を模索しました。

家具は空間が出来上がった後に、その中に設えられるものとして分けて考えるのが一般的です。その家具の機能をちょうど体を包み込むスケールで展開し、それがそのまま部屋になるユニットとして考えることで、家具のような身体感覚を持った、より心地よい空間になるのではないかと考えました。

■展示プランについて

幾度となくスタディーを繰り返す中で、お二人のクリエイターの考えは融合しながら発展していきました。窓は奥行きを持った開口部として内外を穏やかに繋ぎ、そこは生活機能を満たす「家具以上部屋未満」の大きさで作られた、これまでにない不思議な空間として具体化されました。

展示ハウスは、扇形の中心部に位置する半円形のメインリビングから、5つの機能空間が放射状に展開された明快なプランになっています。

全体は延べ床面積約80㎡の比較的小さいコンパクトな大きさとなっており、それぞれ独立した機能空間は、その用途に応じた最少限のボリュームで絶妙な高低差をつけて連結されています。

5つの機能空間は『窓家具』と呼ばれ「眠る」「くつろぐ」「食べる」「思考する」「入浴する」というテーマを持ち、それぞれに特化した設えになっています。

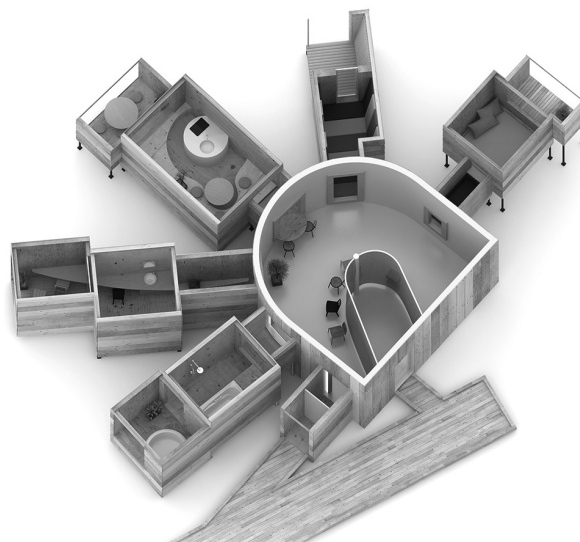


写真3 全体プラン



写真4 外観

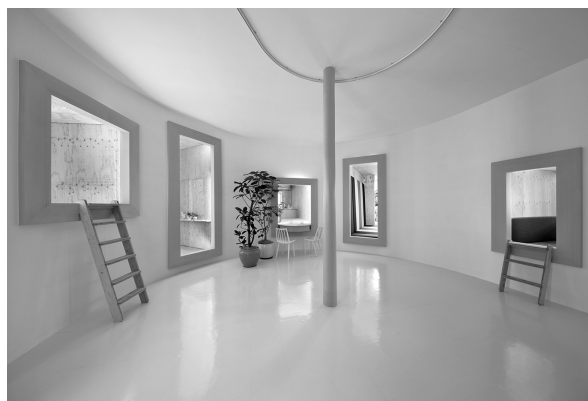


写真5 内観



写真6



写真7



写真8

>メインリビング

5つの『窓家具』を繋ぐ用途を限定しないニュートラルな空間です。

ホールのような天井高約3メートルののびのびとした大きなボリュームをもち真っ白に仕上げられています。その一部は軽やかなカーテンで囲まれた玄関ホールとなっており、適度に視界を遮ることでプライバシーを保つと同時に内外の意識を切り替えます。壁には5つの「窓」が印象的に配置され、生活行為と結びついた各空間への入口となっています。

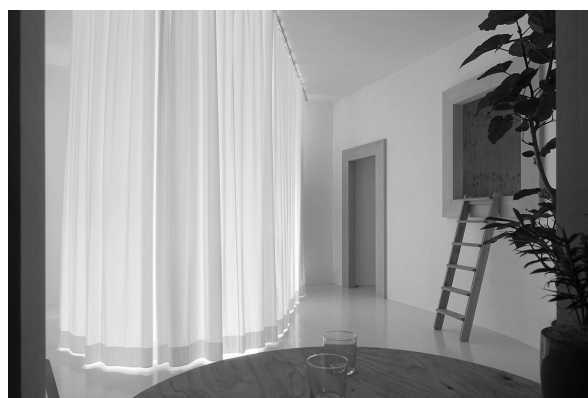


写真9 リビング

>「眠る」の空間

「ちょっとしたお昼寝」や「熟睡」など、さまざまな眠り方に適した空間です。

人ひとりが入れる程度の細長い空間と、その奥に3畳程の空間が段差を付けて繋がれています。

そこは、どこでも寝転がれるよう床全面がクッションのような柔らかい素材で仕上げられ心地よい海風が抜けるリゾート気分を味わえる開放的な空間になっています。



写真 10 寝室

>「くつろぐ」の空間

ソファに座った時の快適さをそのまま部屋にした、ゆったりと過ごせる空間です。

部屋全体がソファ化したお籠り感のある空間は、床と壁を柔らかなファブリック素材で仕上げ、壁にはもたれかかった時のために角度が付けられています。またデッキと連続して繋がっているため、居ながらにして外部の心地よさを感じられるまさに新たな縁側のような空間です。



写真 11 セカンドリビング

>「食べる」の空間

作って、食べて、会話する、さまざまなシチュエーションに合わせて「食」を最大化する空間です。

メインリビングに突き出した大きなダイニングテーブルが印象的な、キッチン、ダイニングテーブル、椅子が一体となった構成です。さまざまな使い方を想定した4段階の高さを上手に組み合わせ、多様なライフシーンに柔軟に対応できる設えとなっています。



写真 12 キッチン

>「思考する」の空間

書斎としてもトイレとしても使える一人で思索にふけるための空間です。

幅を抑えた奥行きのある空間を雁行させたプランにすることで、視線をコントロールしながら個室としての居場所を確保し、一人だけのやりたいことに集中・没頭できるよう工夫されています。

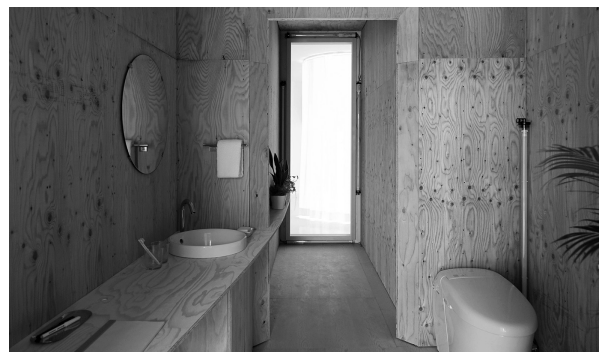


写真 13 トイレ

>「入浴する」の空間

リビングのような内風呂と自然を感じる隠れ家のような半露天風呂のある浴室です。

一人でのんびりと心と身体の疲れをとったり、家族でコミュニケーションを楽しんだり、開放感を味わいながらリラックスできる癒しの空間です。



写真 14 浴室

■最後に

夏の暑い時期にも関わらず3万人以上のお客様に足を運んで頂きました。

建築関係の方はもとより異なる業界の方にもお越し頂き、トークセッションには建築系の学生が多数参加されていました。また多くの外国のお客様が来場され、とても熱心にご覧になっていたのがとても印象的に感じています。

我々の展示ハウスは外観からの印象と入った時のイメージにギャップが大きいようで、入ってくるなりその印象に驚きコメントされる方がいらっしゃいました。

「とても気持ちが良い空間。ずっと居たくなる。」

「隠れ家サイズが気持ち良い。狭さがちょうどよく落ち着く。穴蔵に付む感覚。」

「縁側の発想、昔の家にはこういう空間があったんだよ。」

「リフォームの時に真似してみたい！」

などさまざまな評価の声を頂き、今回我々が伝えたかった、住まいにおける新たな「窓辺」「水まわり」の心地よさを、多くの方々に実際に体感して頂けたのではないかと思います。

また、これから住まいを考える方へ、居心地の良い住まい作りに向けた新たなアイデアの一つとして活かされれば幸いです。

今後もこれからの暮らしをより本質的な価値から考え直す今回のような試みを積み重ね、メーカーとして新たな商品を考えるベースとなるよう熟成させていきたいと考えています。

そして商品の魅力的な設え方の可能性も合わせて提示し、住宅リテラシーの高い方々にも選ばれるような商品やサービスを提供することで、これからの暮らしや住まいを支えていきたいと思っています。



写真 15 トークセッション後の集合写真



写真 16

写真 3 ©HOUSE VISION CG：橋本健一

写真 4. 5. 12.

©HOUSE VISION 写真：Nacása & Partners Inc.

写真 6. 7. 8. 9. 10. 11. 13. 14

写真：永井杏奈



写真 17



写真 18



写真 19